出会いはタカラモノ

子どもから教えられたことばかり

第11回　大切に思える日々をつむぐ

佐藤比呂二

さとう　ひろじ／東京都生まれ。特別支援学校教員。編著書に『ホントのねがいをつかむ―自閉症児を育む実践』（全障研出版部）など。

「笑う」ことが生み出す「生きる力」

いるか分教室（以下、いるか）は国立がんセンターのなかにある院内学級です。小学生から高校生までが治療しながらも学校生活を送ることができます。

みおさんは高校1年のとき骨肉腫を発症し、打ち込んでいたスポーツを突然奪われました。治療を終えて復学しましたが、大学受験に向けてがんばろうというときに再発が見つかりました。「夢に向かって生きようと思うたび、自分の身体に裏切られる」そう感じたそうです。なぜ、こんな思いをしなければいけないのか。理不尽でなりません。

しかし、みおさんは大学生になってからも外来や行事のときには、いつもいるかに来て明るい笑顔をみせ、入院してきた子がいればさりげなく声をかけていました。そんな彼女だから、入院時期がちがう子たちともたくさんのつながりが生まれました。人にはとことんやさしく、自分には徹底してきびしいみおさん。勉強も部活動も一切妥協せず努力を重ね、入院中も大学のレポートに夜遅くまでとりくんでいました。

そんな彼女も、「全部嫌になった」と人目をはばからず号泣したことがあります。そのとき救ってくれたのは、いるか時代から一番信頼を寄せている先生でした。すでに他校に異動していましたが、その夜すぐに駆けつけて彼女の思いをすべて受け止め、笑顔を取り戻させてくれました。

つらいときには泣いていい。泣いた方がいい。安心して泣けるためには、寄り添ってほしいと思える人の存在が必要でしょう。そして、泣けるからまた笑えるときがきます。

「幸せだから笑うのではなく、笑うから幸せ」

これは、みおさんが22歳のとき「がんノート」というネット番組で、同じ闘病中の人たちに贈ったメッセージです。そこにはこんな想いが込められていました。

「がん患者は自分は不幸だと思うかもしれないけど、だからこそ泣くのではなく、笑ってたら幸せだよっていうことが大事だと思っている。確かにつらいこと涙することはいっぱいあるけど、それと同じくらい笑うこともいっぱいある。もちろん、つらいときはいっぱい泣いていい。だけど、笑顔を忘れなければがん患者でも幸せなんだよっていうことをみなさんに伝えたい」

彼女はそう語り、その言葉通りに生き抜きました。

どんなに苛酷な状況にあっても、「笑うことができる」というのは、「生きる力」を生み出します。

先輩の言葉が気持ちを変える

「先輩さん、いらっしゃい」と題した授業に、高校時代をいるかで過ごした青年二人が来てくれました。病気がわかったとき、治療中、そして、退院後の生活で感じた思いを包み隠さず話してくれました。治療の先輩や年長者がみんなを仲間に巻き込むことの大切さ、それにより入院して不安に満ちた子たちがどれほど救われるかなど、体験した者にしかわからない話にみんな引き込まれ、あっという間に2時間がすぎていきました。

参加した中高生の感想です。

「不安だった気持ちや高校に戻ってから大変だったことを話してくれたので安心することができました。副作用の吐き気のことも誰かにわかってほしかったから、わかってもらえてすごく良かったです」

「いるかは勉強するだけの場所ではなく、病室で寝ているだけでは絶対にできない『友だちをつくること』や『友だちと遊ぶ』ことをできるようにしてくれる大切な場所なんだと強く感じました」

こう書いたニッシー（高2男子）は、入院当初はいるかに行くのが嫌で教員が近づいてくるのを察すると布団をかぶって寝たふりをしていました。それが、この翌日から放課後も教室に来てみんなと遊ぶようになり、一時退院できる日も「友だちがいるから退院したくない」とまで言うようになったのです。

ある日、授業が終わるとなにも聞いてないのに突然こう言われました。

「ヒロジ先生、俺、もういるかの大切さ…わかってますから」

そう言って病室へ戻っていったニッシー。そのときのドヤ顔と後ろ姿をこの上なくうれしい気持ちで見送ったこと、忘れられません。

支え合うバトンをつなぐ

寛ちゃんは入退院を繰り返しながら、いるかの小、中、高等部すべてを経験していました。いるかが大好きで中学生のときは一時退院中も新幹線通学をするほどでした。

中3のときの作文「私の夢」の一節です。

「将来、小児病棟の子どもたちの役に立つ仕事に就きたいと考えています。なぜなら、私自身が7歳の頃からずっと小児病棟でたくさんの方にお世話になり、いつか恩返しをした